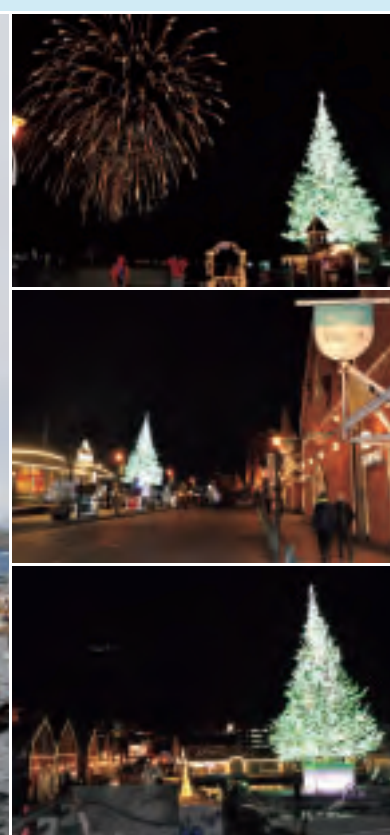


港のたより



(一社) 寒地港湾技術研究センター
COLD REGION PORT AND HARBOR ENGINEERING RESEARCH CENTER



「はこだてクリスマスファンタジー2015」(提供:函館開発建設部 築港課)

Contents

行事報告

- ザ・シンポジウムみなと in 稚内 2
- 第3回 CPC 講演会の開催について「自主研究・受託業務成果を中心に」 3

港湾ニュース

- 「北海道海洋深層水フェア」の開催について 4
- 道北地域連携シンポジウム「道北の農林水産物の輸出を考える」の開催について 5
- 第6回みなとオアシス Sea 級グルメ全国大会 in 宮古 6
- 「第12回みなと座談会」・「みなとまちづくりマイスター意見交換会」合同会議の開催 7
- 第6回北海道みなとオアシス活性化協議会 8
- 函館港での地元高校生によるクルーズ客船受入れの成果 ~第7回観光庁長官表彰~ 9

シリーズ

- 地域での「みなとオアシス」の取り組みについて vol. 6 11

センター通信

- 「第3回 CPC 交流セミナー」を開催 13
- 第1回技術委員会の開催について 13
- 助成事業報告 14

お知らせ

- 第4回 CPC 交流セミナー開催のご案内(予告) 15
- 「海洋エネルギー利用技術 第2版」刊行のお知らせ 16
- 「シビルエンジニア廣井勇のひとと業績」刊行のお知らせ 16

編集後記

16

vol. 115
2015.12.25

行事報告

ザ・シンポジウムみなと in 稚内

「ザ・シンポジウムみなと」実行委員会

「ザ・シンポジウムみなと」は、地域の発展の核となる港湾について、様々な立場から見た北海道港湾の将来の方向に関する意見を紹介していただき、道民の方々に港湾の重要性や必要性を理解してもらうとともに、広く港湾をPRすることを目的としてこれまで道内主要港湾所在地において開催してきました。平成27年度の「ザ・シンポジウムみなと」は、「みなとが繋ぐ島々との夢海道～稚内港を拠点とした観光振興について考える～」をテーマに「ザ・シンポジウムみなと in 稚内」を11月4日(水)、ANA クラウンプラザホテル稚内において、全道各地から約200名の方々が参加し開催されました。

はじめに、主催者として「ザ・シンポジウムみなと実行委員会」の水野委員長からご挨拶がありました。基調講演はNPO 法人離島経済新聞社 統括編集長 鯨本あつこ氏から、『島の光を観に行こう～離島地域の観光振興～』と題して、ご講演いただきました。離島の観光には壁はあるものの、観光客の多い島、忘れられない島旅など、全国各地の離島観光の取組をご紹介します。

引き続き、『インバウンド新時代に向けた課題と戦略的取組について』というテーマで、コーディネーターの稚内北星学園大学 情報メディア学部 講師 藤崎達也氏、パネリストのNPO 法人離島経済新聞社 統括編集長 鯨本あつこ氏、まるぜん観光株式会社 代表取締役 渡辺敏哉氏、株式会社JTB 北海道 MICE・ソリューション営業課 伊藤誠氏、北海道開発局 稚内開発建設部 部長 小松正明氏による、パネルディスカッションが行われ、利尻・礼文の魅力、離島観光の課題、今後の取組として情報発信等での広域連携及び人材育成が必要であること等のご発言をいただき、シンポジウムが終了いたしました。

なお、「基調講演」及び「パネルディスカッション」の詳細につきましては、後日、当ホームページ及び「海と港」第34号に掲載いたします。



■ 第3回 CPC 講演会の開催について 「自主研究・受託業務成果を中心に」

一般社団法人寒地港湾技術研究センター

平成27年9月16日(水)午後2時00分から、北海道立道民活動センター(かでの2・7)「かでのホール」において、第3回CPC講演会が開催されました。

はじめに、主催者として水野理事長から挨拶と寒地港湾技術研究センターの研究概要についての説明がありました、続いて、当センターが行っている自主研究と受託業務の成果から、吉浦研究員、田中次長、橋本次長の3名が発表を行いました。また、千葉博正 札幌大学教授をお迎えして、中国市場へ北海道産品を輸出するための商流と物流の課題及び対策についてご講演いただきました。

先生が行われた台湾での北海道産ワインの味覚調査では「ドライ」という切り口がポイントになるという具体的な内容についても触れていただきました。

本講演会には総勢56名の皆様にご参加いただきました。ご講演をいただいた千葉先生をはじめ、お忙し

い中お集りいただいた参加者の皆様に紙面を借りてお礼を申し上げます。

なお、本講演の詳細につきましては、来年発行の機関誌「海と港」34号に掲載する予定です。



・主催者挨拶及び当センターの研究概要

(一社)寒地港湾技術研究センター理事長 水野 雄三

・「みなと」と地域活性化について

(一社)寒地港湾技術研究センター研究員 吉浦 正登

・北海道のコンテナによる貨物流動について

(一社)寒地港湾技術研究センター次 長 田中 淳

・段階整備が可能な防波堤

(一社)寒地港湾技術研究センター次 長 橋本 茂樹

・特別講演：中国市場向け道産酒類等の輸出可能性

札幌大学教授 千葉 博正 氏



CPC 吉浦研究員



CPC 田中次長



CPC 橋本次長



札幌大学 千葉教授

News 港湾ニュース

■「北海道海洋深層水フェア」の開催について

北海道海洋深層水取水地連絡会
(一社) 寒地港湾技術研究センター

北海道にある海洋深層水の取水施設は、岩内町、八雲町(熊石地区)、羅臼町の3町で整備され、海洋深層水の事業に各々取り組んでいます。

しかし、一般的には海洋深層水の認知度はまだ高くなく、海洋深層水そのものの認知度を上げること及び北海道の海洋深層水を使った商品を一般消費者にPRすることにより、海洋深層水の利用拡大を図り、地域貢献に寄与することを目的に「北海道海洋深層水フェア」を、平成27年10月3日(土)11:00～16:00、札幌駅前通地下広場 憩いの空間(E3～E5)において開催しました。

フェアは、岩内町、八雲町、羅臼町の3町(北海道海洋深層水取水地連絡会)と当センターとの共催で、

NPO 法人北海道みなとの文化振興機構の協賛をいただいて開催しました。なお、岩内町は都合によりフェア不参加のため、今年度は2町が出店することになりました。また、熊石地区から熊石深層水株式会社にも参加いただきました。

今年は24品目の物販品と10品目の試食品が出展され、試食された方々のほとんどが商品の購入をしていただきました。また、本会場を訪れたお客様並びに物販品を購入いただいた方々に北海道の海洋深層水の認知度や商品の感想、当フェア開催に関するアンケートを実施し、154人(回収率52%)の方から回答をいただきました。今後に向けた課題の整理をアンケート結果とともに行っていきます。



八雲町販売コーナー



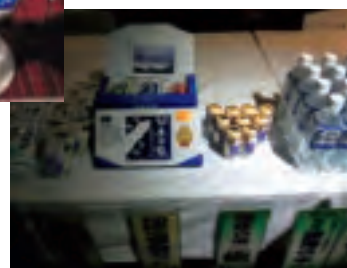
羅臼町販売コーナー



アンケートコーナー



八雲町商品例



羅臼町商品例

道北地域連携シンポジウム「道北の農林水産物の輸出を考える」の開催について

留萌開発建設部 地域振興対策室

留萌、旭川、稚内の道北3開発建設部では「道北地域連携シンポジウム 道北の港から世界へ・道北の農林水産物の輸出を考える」を10月5日(月)留萌市中央公民館において開催しました。当日は道北各地域の経済、行政団体をはじめ、全道各地から約220名の方が参加されました。

このシンポジウムは、道北の農林水産物の輸出を拡大していくために、どのような課題と解決策があるのか、関係機関や関係業界がどのように連携していけばよいか、留萌港及び稚内港のさらなる活用を含めて意見を交わし、将来の発展性を展望することを目的としています。

はじめに、主催者を代表して留萌開発建設部の片倉部長から開会挨拶があり、続いて来賓の稲津久、渡辺孝一両衆議院議員からご挨拶をいただきました。

基調講演では、(一社)寒地港湾技術研究センター事務局長の川合紀章氏が「北海道の農産品の物流とその対応」と題して講演を行い、「北海道の農産品は秋に出荷が重なり輸送コストが割高になっている」など農産品の物流の現状と課題を指摘した上で、「雪氷冷熱の利用など産地保管による農産物流通システムは物流の効率化など多くのメリットがある」などの改善策が提案されました。また、道北地域における農産物のロット集約化の必要性を提案するなど、具体的な戦略等が提言されました。



基調講演 川合 紀章 氏

続いて事例発表が行われ、留萌振興局森林室森林整備課の渡辺主幹が「留萌港からのトドマツ材輸出」、JA 道北なよろの太田販売部長が「JA 道北なよろによる農産物の輸出」、(株)G.I. プランのグレーブ・ジュラフスキー社長が「ユジノサハリンスクにおける道北物産フェア」について、それぞれ発表を行いました。

休憩を挟んだ後のパネルディスカッションでは、基調講演を行った川合紀章氏をコーディネーターに、留萌市長の高橋定敏氏、旭川市長の西川将人氏、稚内市長の工藤広氏の3人がパネリストとなり、「今後の道北農林水産物の輸出促進に向けた戦略的取り組み」をテーマに討論が行われました。



3市長によるパネルディスカッション

3市長は、農林水産物の輸出拡大やサハリンとの経済交流などについて意見を交わし、道北3市の連携の必要性を改めて確認。工藤稚内市長は「サハリン航路は通年に近い形で取り組みたい」、「輸出拡大には高速交通ネットワークや港湾施設の充実も必要」、西川旭川市長は「ユジノサハリンスク市にアンテナショップを造るよう準備を進めている」、「旭川空港を活用した輸出拡大にも取り組んでいきたい」、高橋留萌市長は「留萌にはカズノコの加工技術があり、生鮮品だけではなく加工品の輸出にも取り組みたい」、「TPP 締結後を見据え、留萌港における低温倉庫等の在り方についても検討していきたい」と述べられるなど、熱のこもった議論が展開され、盛況のうちにシンポジウムは終了しました。

第6回みなとオアシス Sea 級グルメ全国大会 in 宮古

北海道開発局港湾空港部 港湾計画課 島谷 奈緒美

9月シルバーウィークの初日2日間、9月19日(土)～20日(日)に、岩手県宮古市で「第6回みなとオアシス Sea 級グルメ全国大会」が開催されました。

宮古港開港400周年を記念して開催された今大会は、臨港通りにある道の駅「シートピアなあと」を舞台に、2日間で延べ2万5千人が来場し、全国各地の Sea 級グルメを堪能しました。

北は北海道の紋別から南は広島県の瀬戸田まで16店舗が出店し、北海道みなとオアシスからも、昨年に続き2回目の出店となる「みなとオアシスもんべつ」が昨年同大会で優秀賞を受賞した「ホタテみそ焼きうどん」(1000食用意)、第1回開催から毎年出店をしている「みなとオアシス苫小牧」が地元グルメの代表「ほっきカレー」(700食用意)、平成30年の宮古-室蘭フェリー航路の就航決定を記念して、一昨年に続いて2回目の出店となった「みなとオアシス室蘭」が、



もんべつ
ホタテみそ焼きうどん



苫小牧
ほっきカレー



室蘭
ヤンコンブうどん

新たな地元グルメとして注目を浴びている「ヤンコンブうどん」(500食用意)を出店しました。

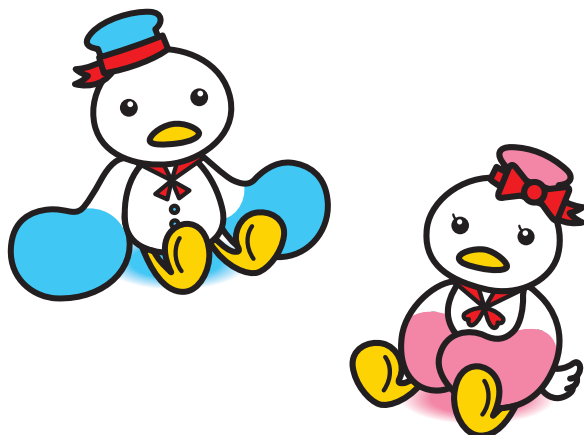
初日は朝からあいにくの雨模様でしたが、お昼過ぎから徐々に晴れ、それに伴い会場は多くの来場者で賑わい、あっという間に初日は終了。2日目は朝から快晴、またステージイベントも充実していたことから、たくさんの家族連れが朝早くから来場し、各店舗に行列ができたため、開会時刻を15分早めて9時45分から販売を開始しました。

大会では、来場者が購入した Sea 級グルメに付いてきた投票券を「おいしい!」と思ったメニューに投票し、その得票数で出品メニューの順位が競われました。その結果、優勝は地元「みなとオアシスみやこ」の「真崎焼き(タコの代わりに地元産ワカメを入れたたこ焼きのようなもの)」、準優勝も同じく「みなとオアシスみやこ」の「サーモンスティック(サーモンをフライドポテトのように細長く切ってあげたもの)」となり、北海道みなとオアシスはいずれも「サーモンくん・みやこちゃん賞」を受賞しました。

今回は直前の台風の影響で、食材とスタッフを乗せた往路の苫小牧港～八戸港フェリーが急遽青森港に入港するなど、想定外のハプニングもありましたが、イベントでは天気にも恵まれ、北海道みなとオアシスの3店舗とも完売という嬉しい結果になりました。

来年も今大会の開催が決定していることから、今後も引き続き関係者と協力し、北海道みなとオアシスと Sea 級グルメのPRを図って参ります。

参加された関係者の皆様、2日間大変ご苦勞様でした。





みなとオアシスもんべつのブース



みなとオアシス苫小牧のブース



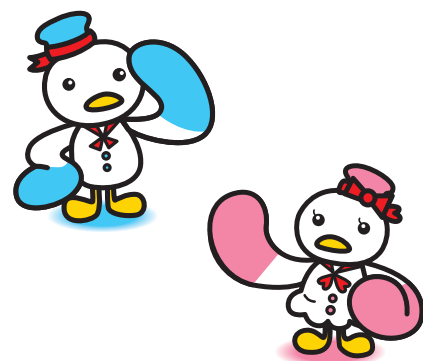
みなとオアシス室蘭のブース



ステージイベント



表彰を受けるみなとオアシスもんべつの竹内代表



■「第12回みなと座談会」・「みなとまちづくりマイスター意見交換会」合同会議の開催

NPO 法人北海道みなとの文化振興機構

11月5日(木)に「第12回みなと座談会」・「みなとまちづくりマイスター意見交換会」合同会議を開催しました。今回は、はじめての合同会議で、道内で7名のみなとまちづくりマイスターのうち5名が参加しました。

「みなと座談会」は北海道みなとまちづくり女性ネットワークの協力を得て、みなとを核としたまちづくりを女性の視点から考え、実際の活動を通じた意見交換の場として、平成16年より毎年開催しており、今年で12回目となります。

はじめにNPO 法人北海道みなとの文化振興機構の中村理事長、一般社団法人ウォーターフロント協会の橋間専務理事からご挨拶をいただきました。

今年の座談会は、「わくわくするみなとまちづくりに向けて」と題して、苫小牧、室蘭、函館、紋別の女性ネットワーク地区代表兼みなとまちづくりマイスター、釧路、留萌、稚内の女性ネットワーク地区代表、網走みなとまちづくりマイスターの8名等による本年

度の活動内容の報告があり、その後、意見交換を行いました。最後に北海道開発局港湾空港部の笹島部長から講評をいただきました。

多忙な折、座談会にご出席いただいた北海道開発局の皆様、みなと座談会開催に向けご協力いただいた皆様に厚く御礼を申し上げます。



第 6 回北海道みなとオアシス活性化協議会

北海道開発局港湾空港部 港湾計画課 島谷 奈緒美

平成 27 年 10 月 7 日(水)、「第 6 回北海道みなとオアシス活性化協議会」を(一社)寒地港湾技術研究センター会議室で開催しました。



中島港湾計画課長から開会の挨拶

今回の協議会は、同日開催された(一社)寒地港湾技術研究センター主催「港湾におけるイベントと地域活性化に関する検討会」に続いて開催し、前段の同検討会では、室蘭工業大学の片石准教授と同センターが平成 25 年から 3 ヶ年にわたり実施した自主研究「港湾におけるイベントと地域活性化に関する研究」の報告や、同研究を通じて明らかになったみなとオアシスの運営に関わる課題等について意見交換が行われたほか、“みなとオアシスりしりとう・おしどまり”では、鴛泊港フェリーターミナルの完成を機に、運営団体の若手メンバーが中心となり、フェリーターミナルの向かいにある鴛泊緑地公園にて、港を中心にまちを盛り上げるイベント「みなとピアガーデン」を昨年から開催している等、今後の運営を担う若手メンバーの発想から生まれた独自の取組についても紹介がありました。



協議会の様子

続く本協議会では、先月開催された「第 6 回 Sea 級グルメ全国大会 in 宮古」の報告や全国のみなとオアシスの取組事例に関する情報共有のほか、もんべつの竹内代表からは“みなとオアシスもんべつ”エリア内に新たにオープンした「アザラシシーパラダイス」について、“みなとオアシス函館”の折谷代表からは、「みなとまちづくり女性ネットワーク函館」が作成した、

函館の Sea 級グルメ「いかめし」のレシピを漫画で紹介する「いかめしブック」について紹介があり、北海道みなとオアシスを益々盛り上げる新たな取組について情報共有することができました。



「キャンディキャンディ」作者のいがらしゆみこ先生が描いた函館の「いかめしブック」

意見交換では、クルーズ客のおもてなしを通じた地域振興や Sea 級グルメの地元普及等、幅広いテーマで活発な意見交換が繰り広げられ、また、みなとオアシスのさらなる PR に向けて、事務局がイベント時に使用する PR グッズ(のぼり等)を作成し、各オアシスに無料でレンタルすることができないか等、これまでに無い新たなアイデアも提案されました。このほかにも、“みなとオアシス室蘭”が「道の駅みたら」に、みなとオアシスの看板を設置し、海外大型クルーズ船「マリナー・オブ・ザ・シーズ」の初入港日に、歓迎の意を込めて除幕式を同日開催した等、今後の活動のヒントになる事例やご意見を多く頂戴し大変有意義な会議になりました。



「みなとオアシス室蘭」の看板除幕式

今後も引き続き、各みなとオアシス運営団体のメンバーの皆様と協力しながら、北海道みなとオアシスの PR を図って参ります。

函館港での地元高校生によるクルーズ客船受入れの成果 ～第7回観光庁長官表彰～

函館市港湾空港部 港湾空港振興課 主査 鶴岡 崇男

クルーズ客船寄港に際し、全国の各港で地域の特色を生かした受入が行われているが、近年外国船社による日本発着クルーズが本格化するなど、特に外国クルーズ客船の寄港が増加し、言語の面で対応に苦慮している港も少なくないのではないだろうか。専門の通訳を配置すれば問題は解決するが、人数の確保や費用面を考えると、現実的には難しい。

そのような中、函館港では平成19年5月に地元高校生の通訳ボランティアによる観光案内のサービスを初めて行った。参加したのは「遺愛女子高等学校」英語科の生徒約180名。学校・生徒サイドからは「生の英会話の勉強ができる貴重な機会」として、港湾管理者サイドからは「外国語対応をサポートしてくれる強力な助っ人」としてお互いの狙いがマッチし、これ以降の外国クルーズ客船寄港時に、通訳ボランティアとしてたびたび参加することとなった。

通訳ボランティアの対応は、通常、船内や岸壁、または函館駅前やバイエリアなどの街中で行われ、生徒

からの積極的な声かけのもと行われる。乗船客等からの質問は、飲食店や両替所をはじめ、Wi-Fiスポットからアニメキャラグッズまで多岐に渡るため、即答できないこともある。生徒達は互いに協力しながら対応するとともに、回を追うごとに街についての知識を深め、それを次の世代につなげるという好循環を作りながら、徐々に質の高い観光案内サービスに発展していった。

生徒達の取組は、単なる通訳ボランティアに留まらない。初めは、見送りイベントへの参加や帰りのバス待ちの乗船客にお菓子や折り紙を配り会話を弾ませるといった小さな「おもてなし」だったが、乗船客は非常に喜んでくれる。人に喜ばれる楽しみを知った生徒達は「もっと喜ばせたい」と考えるようになり、切り絵や神社での参拝体験など様々な企画を自主的に提案。その集大成として、自らの学校を特別開放し、校内を案内、更にはお茶の振舞や書道体験など、乗船客の一生の思い出に残るようなサービスを提供する。こ



インフォメーションデスク



いか踊りでのお見送り



書道体験の様子



駅前で積極的に声かけ

のような取組の「ご褒美」として船から招待され、特別に船内見学をさせてもらうこともできた。

このような経緯を経て、去る10月1日、「国際交流や日本文化の発信に寄与した」として第7回観光庁長官表彰を受けることとなった。クルーズに関連するものとして、また、高校として初の表彰であった。表彰について生徒達に伝えたところ、もちろん喜びの声があがったが、我々周りの大人ほど騒いでいた訳ではなかった。なぜなら生徒達は表彰を受けるために頑張っていたのではなく、「ただ純粋に乗船客との交流を楽しんでいただけ」なのだから……。

クルーズ客船寄港の効果について、とかく経済面ば

かりが取り上げられる中で、国際交流や日本文化の発信という分野で評価を得ることができたのは、観光の街で受入に携わるものとして、大きな糧となった。ただ、「函館港は高校生におんぶにだっこだね」と言われることがないよう、気を引き締めないと。

末筆になりますが、観光庁長官表彰の栄誉をいただけたのは、活躍の場を設けていただいた船会社の方々、生徒達の取組を取り上げていただいたメディア関係の方々など関係者皆様のお力添えのお陰と考えております。生徒達に代わり、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



校内を特別にご案内



船内見学のご褒美

